

Title	釋棕(稻葉君山著, 寶黄室藏版)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.1 (1937. 4) ,p.157- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370400-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

釋 榆 (稻葉君山著)

著者が還暦を自ら祝せられて數種の論文を集め、之に寫眞圖版及び論文著書目録を添えて出版せられたもの、本書の題名は巻頭論文「百濟の椋及び椋部」よりきざしてをる。本論文に於て著者は北史百濟傳に見ゆる椋部は、實は翰苑、三國史記より見れば椋部、原部が正しく、倉庫部を意味し、日本に於ても歸化人が此制度を傳へ、椋もクラと訓ずるのも歸化人の仕業であると云ひ、クラは本來朝鮮語であり、滿洲に於て行はれたが之は本來高句麗語「桴京」に由來するのであり、京は支那式のクラであり、高句麗は之を支那より輸入すると共に桴の字を配したのであり、そして桴が *khu* に近い方言を表はしたものであらう。我國にはクラの組織未だ發達せざりし時百濟よりこのクラの機構が我國に輸入せられ、我國の制度は之により大なる影響を與えられたものであらうと論ぜられてをる。著者の意見は如何にも示唆的であり、上代文化の潮流を示す上に極めて面白い研究であるが、我國で座をクラと云ひ、圍繞することをクルムと云ひ、岩、谷間をクラ、岩穴をヤグラなど云ふ習俗から考へると倉と云ふ語は全然輸入語であつたと考へるのは少し困難の様に思はれる。勿論著者はあつて日本上代にクラの存在を否定するのではないがクラの組織が極め

て發達してゐなかつたとし、その證としてホコラ（寶倉）を例とされ、ホはクラの形容詞であら、クラは神祠を意味し、最初神祠も倉庫も未だ別がなかつたからホコラなる造語が生れたのであらうとされてをるが然しこのホコラ、ホクラは博士の様に解される外に之を神體を納める宮の意味に解し、ラを單なる後添詞と見る民俗學的解釋法も存在し得るのである。更に著者はクラの語と高句麗語「溝瀆」との間の關係を註の中に敍及せられてをるがこの「溝瀆」といふ語は昔から問題の多いものであり、之を單に「倉」といふ名辭から解釋し去るのは如何かと思はれる。要す世人の注意を喚起せられたことはまことに機宜を得たるものと云ふべく、願はくば學界が今後今一層廣い比較研究の立場から此興味多き疑問を検討して貰ひたいものである。「校倉の跡を探ねて」は此クラの型態はアゼクラ的の構築であると推定し、半島、樺太、滿洲に於ける同種の建築や土器遺物を尋ねた記文であり、「長生標及び長生庫」は高麗時代の寺院の經濟的機構であつた長生庫の性質、寺領の界標であつた長生標のことを解明されてをる。

本書はまことに史家、考證家として著者の風貌をしのばしむる好著述であり、著者が今後筆硯を新たにして益々學壇に雄飛せられんことを冀つて拙い紹介の筆を擱く。（松本信廣）

文獻論叢（國立北平故宮博物院文獻館印行）

甲骨文字學、燉煌學及び檔案學は現今支那に盛行してゐる學問